



今年もまもなく母の日(5月第2日曜日)を迎える。「お母さんに、日ごろの感謝とともにひと言『検診受けてね』と添えてもらえれば」。自らの闘病体験を踏まえ、乳がんの早期発見や診断、治療の必要性を訴える。「ピンクリボン」は啓発活動のシンボルだ。

1999年に検診で乳がんが分かった。マンモグラフィ(乳房エックス線撮影)で石灰化が見つかり、のちに乳がんと診断された。

「『自分に限ってありえない』という思いだった。自覚症状もなく、頭の中が真っ白になった」。しかし、発見が早かったおかげで、乳房温存手術を受けることができた。術後1か月間の放射線治療を経て、投薬での治療に切り替わり、「抗がん剤を使わずに済んだのも、早く見つけられたおかげ。体の負担も少なかった」と振り返る。

自分ががんになったことで、

NPOピンクリボンひめじ代表

石井尚美さん 55 (姫路市)



乳がん 検診習慣づけを

乳がんについて何も知らなかったことに気付かされた。診断後に医学書を読んだり、インターネットで調べたりするうちに検診の大切さを知った。

「同じような境遇の人たちと話し合うことで、お互いに悩みや不安を解消できるのでは」。手術からまもなく、病院で知り合った仲間と患者会を結成した。

再発のリスクが減少する術後10年が経過した。「『元患者』として何ができるだろうか」。考えついたのが、早期発見につながる検診の啓発活動だった。

2012年にピンクリボンひめじを設立。以来、少しでも病気と検診への関心を高めようと、母の日と「乳がん月間」(10

「まずは自己検診から習慣づけて」と呼びかける石井さん(姫路市で)

月)に合わせた街頭キャンペーンなどに取り組んでいる。

昨年10月1日には、平成の大修理を終えた世界遺産・姫路城(姫路市)をピンク色にライトアップ。姫路市長に要望書を提出するなど、各方面の協力を得て実現にこぎつけただけに、白亜の大手守が運動のシンボルカラーに染まった時は「多くの人々の協力で思いがかなった。本当にうれしかった」。

最近では芸能人が乳がんを告白することもあり、検診への関心は高まっている。それでも受診率は70〜80%に達する欧米に比べ、20〜30%とまだまだ低いという。早期発見、早期治療は死亡率の減少につながる。とされる。「まずは自分で胸をチェックする自己検診を習慣づけることから始めてほしい」と呼びかける。

乳がんで悲しむ人を一人でも減らしたい。その思いが活動のエネルギーになっている。

(藤田真則)